

平成28年度学生と学長との懇談会
 本学に対する学部学生からの意見・質問への回答

1 大学教育（研究、カリキュラム・授業内容等）について		回答
1 総合科学部	蔵本キャンパスのEnglish+（プラス）の活動日を増やしてほしい。	<p>常三島キャンパスの学生の方にも English+ に関心を持っていただき、ありがとうございます。現在 English+ は月曜日から金曜日のランチタイムに学生スタッフが English only のフリートークの時間を設けています。毎月第2金曜日のランチタイムは歯学部との International Friendship Room との合同 Happy Lunch Hour も開催しています。また、不定期ですが要望があれば夕方に海外交換留学の報告といったプレゼンテーション等の機会も設けています。</p> <p>English+ は主に蔵本キャンパスの学生主体の活動ですので、活動日・活動時間に関しては授業・実習を考慮し、学生さんが可能な時間を決めていきます。活動日を増やして欲しいというご要望については学生に伝えませんが、ご希望に添えない場合もあるかもしれません。ご了承ください。</p>
2 総合科学部	時間割はどのようにして作られているのか。	<p>時間割を作成するのは教務委員と学務係の仕事です。毎年10月から次年度の計画を始め、カリキュラムの編成や担当教員の決定と並行しながら時間割の編成を行っています。教養教育科目（特にクラス指定の語学やウェルネス）や教職関連科目（特に教職免許取得に必修となる科目）の時間割と重ならないよう調整するほか、教室の使用状況（特に情報端末室や大教室）や担当教員の都合（特に非常勤講師の先生）も反映されます。また、学部共通科目の配置は原則としてコース専門科目より優先されます。履修する学生の立場から見て、前期と後期および集中講義として開講される科目数のバランスを考えると、なるべく特定の曜日や時間帯に偏らないようにすることなど、時間割編成時には配慮しています。ただし、考慮すべき要素は非常に多く調整が複雑なため、ある程度偏りが生じることは避けられません。しかも状況が変化するため、修正や変更が生じます。その時は掲示板やメールで学生に通知しています。学生諸君には時間割編成について事情を理解し協力をお願いします。</p>

平成28年度学生と学長との懇談会
 本学に対する学部学生からの意見・質問への回答

1 大学教育（研究、カリキュラム・授業内容等）について	回答
<p>3 総合科学部</p> <p>心理学を学ぶ、研究したくて人間文化学科に入ったのに、ゼミ選びの選考に落ちて体育系のゼミに入ったという知り合いがいる。本当に研究したかった学問ができないというのは、大学進学の本来的な目的からずれてしまうのではないか。</p>	<p>教務委員長及びコース代表から以下のとおり回答します。</p> <p>一般論として、コース配属は学生の成績によって、ゼミ選択は学生が希望する研究テーマと指導にあたる教員のマッチングが重視されます。ゼミ生が多すぎると教員の指導が行き届かなくなるので、希望者多数の場合はやむを得ず調整をします。それに外れた学生が報われない気持ちになることは理解できますが、本人の学業成績や研究への熱意が不足したわけでも、その先生に嫌われて拒否されたわけでもないので、研究面で相談があれば助言してもらえます。心理・健康コースでは、昨年度のゼミ分属時に一部で調整がおこなわれ、心理学希望の学生が体育系のゼミに入ったことは、教務委員会として把握しています。こうした調整がありうることは事前のコースガイダンスで説明していますが、今年度は文書や口頭でさらに詳しく周知を図ることを申し合わせています。</p> <p>次に心理・健康コースの立場から説明します。コースの学習目標は、人間の心と体の健康を総合的に志向する能力を身に着けるために、心理学とスポーツ健康科学の両面を学ぶことです。心理学だけを学ぶコースではありません。このことは入学募集の段階から明確に示しており、了解されて入学されているかと思えます。コースの教員ゼミ選択では学生ニーズとマッチングできるように、各教員は4名までは無条件で受け入れています。しかし、教育指導の質が落ちるため7名以上はとれないことにしています。ある教員に希望が集中した場合は選考を行い、選考から落ちた場合は第2志望以下のところに移動してもらっています。しかし、心理学とスポーツ健康科学は学問的には違う領域ですが人間の健康をテーマにした専門領域としてどちらも重要な領域です。それについては、コースの授業内容や卒業論文の内容をご確認ください。例えば、脳神経生理学と生理心理学はほぼ近接領域ですし、スポーツ心理学では心理学研究の手法を使います。スポーツ社会学でも社会心理学的手法を使った卒論も書いています。このように心理系ゼミに入れずスポーツ健康科学系に移った学生でも学生の関心に近い領域で学習できるようにコースで対応をしています。スポーツ健康科学系の教員ゼミから臨床心理士になるために心理系大学院進学する学生も当然います。心理学ゼミの学生でも健康運動指導士や保健体育の免許を取る学生もいます。これが心理・健康コース（心身健康コース）の学修の特徴です。</p>

平成28年度学生と学長との懇談会
 本学に対する学部学生からの意見・質問への回答

1 大学教育（研究、カリキュラム・授業内容等）について		回答
4 総合科学部	総合科学部と工学部の予算の違いが気になる。工学部の学生は研究に必要なものや調査にかかる費用は負担してもらえるのに対し、総合科学部の学生は全て自費となっている。	総合科学部でも教育・研究予算の確保充実に努力していますが、国の財政状況もあって潤沢とは言いがたい状況です。文系では伝統的に、学生の研究に必要な図書や調査に関する費用は自己負担というのが普通となっています。工学部では研究室が一丸となって特定のテーマに取り組み、大学院生や学部生が協力して研究に当たるというケースが多いですが、総合科学部では学生が研究テーマを自主的に決定し、教員がそれをサポートするというスタイルが多いです。このことが予算の使い方（学生から見た費用負担）に反映していると考えられます。こうしたカルチャーの違いを理解した上で、担当教員とご相談ください。
5 総合科学部	周囲の学生が、卒論に対する大切度が判っていないため、卒論提出方法及び発表スケジュールを知らないなど学生の認識レベルに差があるので改善すべきではないか。	卒論については、担当の指導教員、学部・学科により違いがあるのが現状である。教育の質保証の観点からも差し障りがあるので、早期の告知など必要な指導をしていきます。 学生の意見を適切にくみ取り、教育改革に反映させるシステムとして「徳島大学教育について考え提案する学生・教職員専門委員会」を組織しているが、忙しいとのことで学生の参加が少ない状況である。学生の意見を積極的に取り入れたいので、専門委員会へ積極的に参加して欲しい。

平成28年度学生と学長との懇談会
 本学に対する学部学生からの意見・質問への回答

1 大学教育（研究、カリキュラム・授業内容等）について	回答
<p>6 医学部</p> <p>現在、栄養学科の分野で実験・研究を行っている。来年も同研究室で院生として研究させていただく予定だが、他の研究室との交流があまりないなと感じている。せっかく同じ大学内で研究をしているので、学会や発表会以外でも、もっと気軽に交流する機会があれば、より研究の活性化となる刺激があるのではないかと思う。これは栄養学科内だけではなく、他学部との交流も同様だと感じる。</p>	<p>医科栄養学科では、平成15年の学科棟の改修時よりオープンラボの環境を整備しており、分野を超えて自由に教員・学生が研究や学業、生活面で交流を図ることができる環境にある。また、大学院生の中間発表会や学位論文の発表会は、公開で行われているので、他分野の研究に触れる機会も多い。さらに、大学院生になれば、蔵本キャンパスでは、他分野、他教育部の学生とも一緒にセミナーなどで相互に発表するような授業なども様々に行われている。国内外の著名な研究者を招いた講演会は、1年を通じてたくさん実施されている。栄養学科の4年生では自分の研究だけで余裕が無く、また学外臨地実習や国家試験対策などもあるため、そのような交流の時間をうまく作ることができていないのかもしれない。交流の機会はたくさんあるので、積極的に参加し交流を図って欲しい。学部学生も参加しやすくするような配慮は引き続き考慮したい。</p> <p>当該学生の卒業研究の所属分野でも同様で、夏に4年生の研究発表の機会を公開で設定しており、また年十数回開催される教室関連の講演会へも4年生の参加を積極的に推奨している。教育クラスターのリトリートでは、毎年少なくとも4～5名の大学院生が発表し、学内の肥満・糖尿病研究者で開催されている月1回の研究交流会でも大学院生が定期的に発表し、他学部の教官や大学院生などとの交流する機会を提供している。さらに臨床栄養学オープンカレッジも学生に開放して、学内のみでなく実際の現場で働いている管理栄養士と積極的に交流できる場を提供している。研究においても医科栄養学科以外の医学科の臨床講座や疾患酵素学研究所などの他学部・研究所に加え、理化学研究所や神戸大学、群馬大学などとも共同研究を実施しており、相互の施設で積極的に交流が行われている。大学院生になれば当該分野がむしろ交流の機会に恵まれていることを実感できるのではないだろうか。</p>

平成28年度学生と学長との懇談会
 本学に対する学部学生からの意見・質問への回答

1 大学教育（研究、カリキュラム・授業内容等）について		回答
7 工学部	経営学、経済学の授業を一つは開講してほしい。エンジニアとして働くにしても経営、経済のことを知っているのと知らないのではまったく異なる。専門技術の勉強のみでは偏った思考になり、企業の利益になる開発やユーザーのニーズに応えるような開発ができる技術者が育たない。	教養教育院の開講科目には「経済学入門」「経営学入門」のほか、科目名に「経済」を含む科目だけでも4科目が開講されています。工学部の開講科目にも「ニュービジネス概論」「労務管理」「生産管理」など、将来の技術者のための経営関連科目がありますので、それらを受講されてはいかがでしょうか。
8 工学部	テストに関して暗記で乗り越えられる授業が多いので、考えて問題を解決する力が身につかない。そのため、学生は単位を取ることにばかりに意識を向けてしまい、授業で教わる知識が将来役に立たない。	テストを暗記で乗り越えようとしても、卒業要件の単位をすべて修得することは困難であり、どこかで必ず壁にぶつかることでしょう。そのような誤った考え方に一部の学生諸君が陥ることは教員側も認識しており、工学部のほとんどの教員は、講義・演習や試験に際して工夫をしています。また、なるべく早期にそのような考え方が改まるように「SIH道場」など、アクティブラーニングの取組にも力をいれているところです。
9 理工学部	大学入学後のコース変更をもっと簡単にしてほしい。（入試の際のコース選択をしっかり考えている受験生は多くないと思う）	1年終了時の志望と成績によって、コース変更も行えるコース配属制度を設けています。
10 理工学部	理工学部になった意味がよく分からない。（応用理数コースで授業を受けているが、工学的な要素は全くないし、他コース履修に関しては、消化するためのもののイメージが強いのであまり意味がない気がする）今年の1年生から理工学と一つにまとめたが、混乱を招くだけで意味がないと思う。	科学技術の進歩にともなって、理学と工学の融合は全世界の潮流になっています。徳島大学は、理学部・工学部の両方を有する大規模大学とは異なりますが、この潮流への対応が将来重要になるとの認識のもとで今回の改組を行いました。STEM教育や他コース履修などの教育プログラムだけでなく、学生や教員の研究活動における理工融合も重要な目的であることは、学年の進行とともに学生諸君にも理解してもらえると信じています。

平成28年度学生と学長との懇談会
 本学に対する学部学生からの意見・質問への回答

1 大学教育（研究、カリキュラム・授業内容等）について		回答
11 理工学部	カードシステムをやめた方がいいと思う。結局先生が出席をとっていることが多いので二度手間なことも多く、カードキーを通して帰る人が多いので、大学側が学生に対し学習意欲を求めるのであればない方がいいのかなと思う。	カードシステムについては教員の間にも賛否があり、授業で採用するかどうかは各教員の判断に任されています。カードシステムを利用することで大勢の出席確認に要する時間を節約できますし、学生と教員の双方がwebを通じて出席状況を随時確認できるメリットもあります。進歩するテクノロジーに合わせて出席確認の方法は今後も変わっていくことでしょう。なお、カードシステムの不正使用が発覚した場合は不正行為とみなされる場合があります。 出席を取るために出欠記録システムを使用するかどうかについては、授業担当教員に一任されており、小人数のため使用していない場合や、最初から手動で行っている場合、TA等に出席記録を依頼したり、小テスト等で再度確認するなど、担当教員の方針で行われています。
12 理工学部	履修登録の際、教務事務システムの頁で必修で取るべき単位をコースごとにまとめて書いていただけると楽。	教養教育や理工学部の履修の手引にはコースでの必修科目が記載されています。手引きにはその他大学での勉学に必要なことが記載されていますので、必修単位の確認と併せて活用してください。
13 生物資源産業学部	学部の専門科目の分野自体は広く、生徒それぞれのやりたいことを探すという面では大変役立っていると思うが、多分野に広がりすぎて、それぞれの分野がものすごく浅い授業になってしまっている。	本学部の入試では多様性に富む学生を選抜しており、1年次では基礎学力の充実に力を入れているため、このような授業内容にしています。
14 生物資源産業学部	特定の科目内で教授が交代しながら授業を行っているが、どうも教授間で情報交換できていないのか、同内容のことを繰り返すことが多い。	1年次では、重要な部分は複数の科目で重複して講義を行い、基礎知識修得の徹底を図っています。